

(曾於郡末吉町深川)

位置と環境

本遺跡は、同町深川の内村と小倉の集落間とに広がる台地に所在し、標高約250mを測る。

遺跡の東側から北側へかけては、大淀川支流である村山川の谷頭となっている。その比高差は、15～20mで急崖である。さらに、北側には東西に国道10号線が走っており、旧街道の高岡筋に当たる。

調査の経緯

調査は、平成8年に深川内村地区において、農村地域工業等導入事業に伴い、末吉町教育委員会が本調査を実施した。調査面積は、5,000㎡である。

遺構と遺物

小倉前遺跡の層序は、以下のとおりである。

I層は、耕作土である。

II層は、黄白色軽石層で、桜島起源の文明降下軽石（ボラ）で、1471年頃とされている。

III層は、黒色土である。

IV層は、茶褐色土層で、微小のパミスをやや含む。縄文時代晩期の包含層である。

V層は、暗茶褐色土層で、多量のパミスを含む。

VI層は、霧島火山御池軽石層で、約4,100年前の噴出物である。

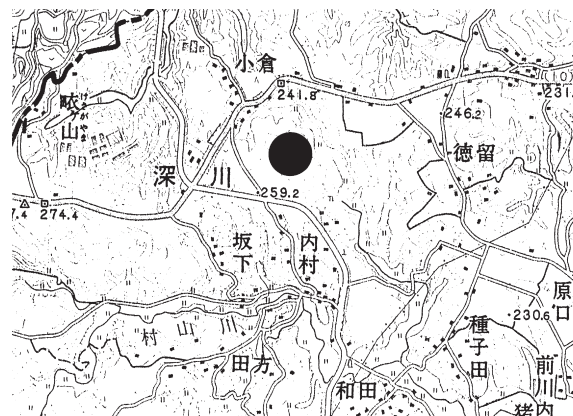
VII層は、アカホヤの二次堆積層である。

VIII層は、黄橙色土を呈するアカホヤ層で、鬼界カルデラ起源とされ、約6,400年前の火山灰である。最下面には明瞭な火山豆石が確認できる。

本遺跡では、主に縄文時代中期と縄文時代晩期後半に該当する遺構と遺物が出土した。

縄文時代中期では、春日式土器が出土した。この土器はVI層に覆われて出土したために、VI層の土層が注目されることになった。

このVI層は、霧島火山群の御池噴出物とされ、通常「御池ボラ」と呼ばれている。御池ボラは、本県と宮崎県との県境に分布するために、これまであまり考古学の分野では議論にならなかったが、近時では土器編年上で鍵層として有用であることが認識され始めている。



第1図 小倉前遺跡の位置

「御池ボラ」は、約4,000年～4,100年前の噴出年代が与えられている。本遺跡の春日式土器との関係では、松山町の前谷遺跡、宮崎県田野町の天神河第1遺跡でも見られる。

遺構は、VII層面の数か所に遺構らしい痕跡を認めたが、竪穴住居跡までには至っていない。

土坑は、3基を検出したが、長径は約80cmで、深さ約80cmで、すべて同様の形態をしており、埋土の上位には、小片の遺物が、中・下位にはやや大きい土器や石器などの遺物が出土した。

縄文中期は、春日式土器と、石鏃・石匙・敲石・磨石・石皿などの遺物が出土した。

土器は、春日式土器で近年では瀬戸内系の土器との関係が論じられている。

春日式土器は、「器形は胴部がやや張り、頸部はわずかにしまる。口縁部は外開きから内湾してキャリパー状を呈し、底部は上げ底になる。ほかに底部から直線的に開くバケツ状のものもある。」と定義される土器である。

型式設定当初では、縄文時代前期末として位置づけられていたが、現在では前述の御池ボラ層直下での出土例や瀬戸内系の船元式土器との共伴関係から縄文時代中期への編年が妥当との意見が強くなりつつある。

他形式の土器との上下関係では、これまで報告された報文において、上位から並木式・阿高式土器が出土し、春日式土器の下位から深浦式土器が出土しているようである。

ところで、春日式土器の器形（特に口縁部）の特

徴から4段階に分類し、下記のように(I)から(IV)へと古い順に区分する見解がある。

- (I) 北手牧段階(穎娃町北手牧遺跡)
- (II) 前谷段階(曾於郡松山町前谷遺跡)
- (III) 轟木ヶ迫段階(大根占町轟木ヶ迫遺跡)
- (IV) 南宮島段階(始良町南宮島遺跡)

これに従えば、本遺跡の春日式土器は(II)の前谷段階に該当するといえる。

次に、文様を区分すると、次ぎの8グループに細分できる。(i)無文、(ii)突帯文、(iii)突帯文+沈線文、(iv)沈線文、(v)沈線文+刺突文、(vi)突帯文+刺突文、(vii)刺突文、(viii)突帯文+沈線文+刺突文である。

このように、本出土の土器は、まだ研究段階にある土器型式と言ってよく、他にも検討課題を多く残している。

また、人面とみられる土器片や注口の土器片も出土しており、縄文中期頃における広範な出土資料と、これらとの比較も必要となろう。

中期の石器のうち、石皿と磨石は距離的に接近して出土しており、セット関係とみれるもので、木の実などの採集生活が窺える。

石匙は、縦型と横長の石匙9点が出土し、現在の小刀やナイフのような用途に使われたと考えられている。

縄文晩期では、土坑数基の検出があった。

遺物は、夜臼式土器や黒川式土器などの土器の出土があり、石器は、打製石斧・磨石・敲石・石皿などが出土した。土器のうち、夜臼土器は、本町の上中段遺跡でも同時期の遺物が出土しており、資料の増加で、さらに詳しい検討ができるようになった。

晩期の遺構は、土坑数基が検出され、その中から土器・石器が出土したが、土坑以外の遺構の検出はなかった。

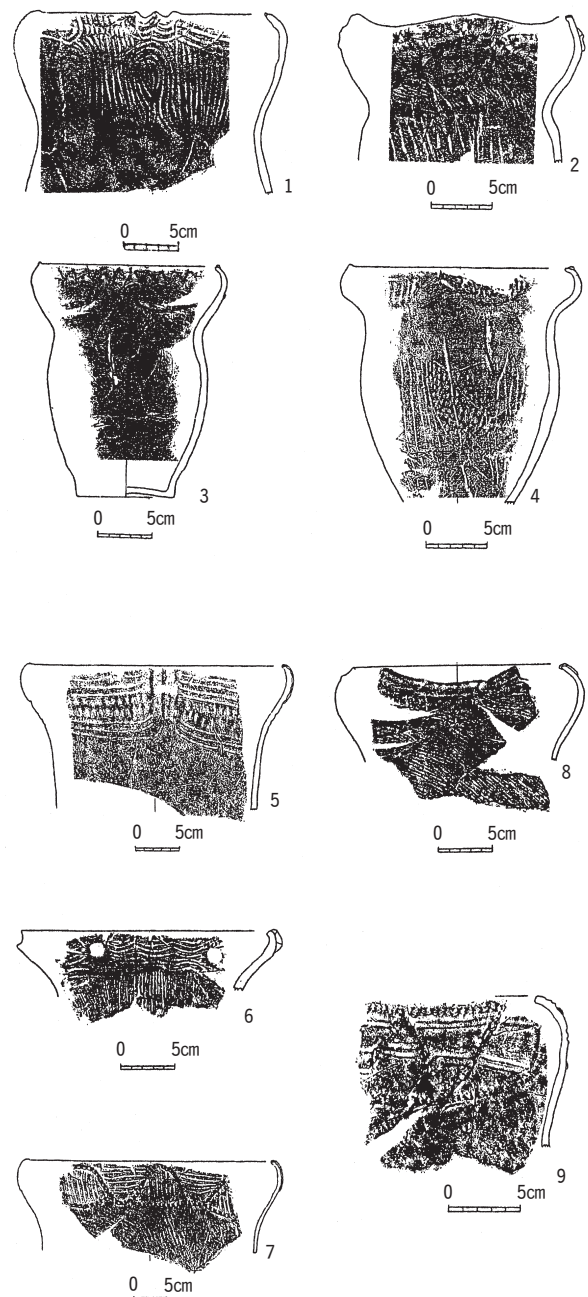
このほかに石斧2点が同一箇所から出土したが、これは当時意識して置かれたものであるのか不明であった。このような遺構は、作業収納と祭祀目的が言及されるが、そこまでは推量できなかった。

縄文晩期の遺物は、石器の数量は少なく、土器は突帯文文化期である夜臼式土器が多量に出土した。

このほかに、縄文時代晩期中葉頃の土器とされる黒川式土器も多くはないが出土している。浅鉢は、黒色研磨土器で、口縁部より胴部が膨らむ。あるいは頸部から肩部は短くて、くの字状に屈曲して胴部に延びる一群の土器である。

土器の器種は、甕形土器、鉢形土器、皿形土器、高杯形土器、それに壺形土器と考えられる丹塗り土器などの破片が出土した。

甕形土器は多く、口縁部と肩部に刻目の突帯を巡らすものである。この土器は夜臼式土器と呼ばれて



第2図 小倉前遺跡出土土器(後記資料より)

いる土器で、北西九州を主体に出土し、稲作が始まる時期の指標となる土器といわれている。

本遺跡で最も多く観察されるタイプは、口縁部とその下に二条の突帯が巡る甕形土器で、口縁部は一般的に内傾し、突帯のある肩部部分で「く」の字状に屈曲して胴部に至る。口縁部の突帯は口唇部よりやや下位にある。口縁部の突帯と肩部の突帯の間隔は概ね3.5～7 cmである。また、突帯に施される刻目は鈍いヘラ状工具によるもので、1～1.5cm間隔で雑に刺突されており、突帯上を巡る。従って、口縁部に一条の突帯が巡る甕形土器は少なく、刻目も指頭状や鋭いヘラ状工具によるものは少ない。突帯のない甕形土器も若干あり、中には口縁部外面に直接刺突連点文を施すものもある。

夜白式土器の底部や胴部には、圧痕が残る事例も多く、本遺跡では蓆目、網目、布目があり、土器製作時によるものと言われるが、縄文時代の編む織りの技術を知る上で貴重な資料となった。すなわち、縄文時代の衣食住のうち、「衣」の解明に役立つということである。

以上のように、本遺跡出土の遺物は、前述の上中段遺跡資料と比較しながら、時代の新旧関係を考える上で良好な資料である。

そのほかの時代の遺物には、縄文時代後期の指宿

式土器や市来式土器などの土器も少量が出土しているが、極めて少ない出土量であり、紹介に留めたい。また、縄文時代早期の土器も確認調査で見られたものの、広がりはいくつかのものではなかった。

一方、石器は、磨石・敲石が多く、それに伴うとされる石皿や台石がある。石斧は打製石斧で、破損したものが多し。なお、打製で刃部が湾曲する石庖丁状の石器が欠損した状態で出土したが、稲作開始期のものが考えられ、今後の検討材料としたい。

特徴

本遺跡は、霧島火山系の御池ボラの噴出年代を利用することにより、これまではっきりしなかった縄文時代中期の様相を層位的に検証することができ、出土した春日式土器の編年的位置付けのために貴重な遺跡である。御池ボラより一段と古い池田火山灰を利用することで、より精密さが増すことが予想される。

資料の所在

出土遺物は、末吉町立歴史民俗資料館に保管されている。

参考文献

鹿児島県考古学会研究発表資料1998年12月

—平成10年度秋季大会— 鹿児島県考古学会

(勝目興郎)